

## 映画《動いている庭》にまつわる話

Souvenirs du documentaire "Le Jardin en mouvement"

澤崎賢一  
Kenichi Sawasaki

思いがけず涼しく、雨が降ったり止んだりする京都の梅雨のシトシトと滴る窓外のしずくを眺めながら、さて何を書こうかと夜の時間を弄んでいる。そういえば、僕がフランスにあるクレマンさんの庭を訪れた夏の日も、思いがけず肌寒く、曇りがかった空から唐突に太陽が顔を現したり、かと思えばいつの間にか雨が降り始めていたり、なんとも表情豊かで、今年の梅雨のようでもあったかな、と思いつく。

僕がクレマンさんの活動を記録したドキュメンタリー映画《動いている庭》①を制作したのが2016年で、第8回恵比寿映像祭でのプレミア上映を皮切りに、幸運なことにこの映画は日本の主要な都市のいくつかの映画館で公開されることになった。この原稿を書いている2019年7月現在、映画を制作してから3年以

上、撮影時は2015年2月と8月だから僕がクレマンさんの庭を撮影して、からまる4年の時が過ぎようとしている。今日もクレマンさんは、あのときと変わらずぬ、庭に溶け込んでしまうための隠れ蓑のような色あせた赤いジャンパーを纏って、庭に出ているだろうか。

この映画は、ほとんど奇跡的に生まれてきた。まずはきっかけに少し触れておこう。僕はアーティストとして現代美術作品を作る傍ら、映像作家として様々な記録映像も作っていたのだが、クレマンさんを撮る直接的なきっかけは、当時、総合地球環境学研究所（以下、地球研）で働いていたエマニュエル・マレスさんからの依頼である。その内容は、ジル・クレマンというフランスの庭師が、地球研

で行ったとき、実は映画を作る話など欠片も存在していなかった。そもそも僕は長編映画を作ったことがなかったし、映画業界に人脈もなかったから。

長編映画が生まれた直接的なきっかけは、恵比寿映像祭である。恵比寿映像祭は、東京都写真美術館をメインに、恵比寿一帯で毎年行われるアートと映像の祭典で、毎年異なるテーマで開催されているが、2016年に開催された第8回のテーマはクレマンさんの「動いている庭」だった。この話を聞いたとき、僕はフランスでクレマンさんを撮影した映像素材の確保作業をしながら、どうやってアウトリーチできるかを模索しているところだった。そんな折、恵比寿映像祭のキュレーターである田坂博子さんから、メイン会場のひとつである恵比寿ガーデンシネマで公開するために、長編映画として制作できないかという打診があったのである。

公開するための場がすでにあり、求められていることが明確であれば、物事は自然と動き出すものである。不慣れなことにとともに労苦はもちろんあったが、そこからプレミア上映までは早かったように思いつける。上映初日、一緒に編

集作業を行ってきたエマニュエルさんと初めて映画館で自分たちが作った作品を見たときは、妙な緊張と一緒に感慨深いものが込み上げてきたものだ。

映画の中で京都の町並みを歩くクレマンさんは、いつも物静かで周囲に目を配りながらときおり足を止め、じっと何かを見つめては聞き取れぬような声でつぶやき、写真を撮る。決して急ぐことなく、ゆっくりとじゅくりと観察しながら、傍らに寄り添うエマニュエルさんと山内さんに質問を繰り返していく。

道端ですれ違う柴犬、立ち飲み屋で食べるごぼう、料亭でテーブル上に並べられた様々なかたちや装飾の小皿、池の中に揺らめく錦鯉等々、クレマンさんの興味がそういつた暮らしの中にあるふれたものがあったことは、僕にとっても興味深かった。

僕は最初、クレマンさんが視線の先に何を見ているのかが分からないことが何度かあった。カメラマンとしては、周囲の状況を鑑み、被写体の視線の先を読み、次にどのような動きをするのかを予想し

主催の連続講演会のために来日し、日本各所を視察するので、その様子を記録してほしいというのだった。このときの10日間ほどのクレマンさんの日本視察の様子は、「ジル・クレマン連続講演会」②という地球研が制作した記録映像で見ることができる。その様子はまた、映画《動いている庭》の中でも一部紹介されるが、映画の主要な部分は、それから半年ほど後に、僕がフランスのクルーズ県にあるクレマンさんの庭をひとりで訪問したときの様子である。

僕がどのようにクレマンさんに惹きつけられていったのか。それについては、もう少しあとで触れようと思うが、この映画の成り立ちが奇跡的なのは、いくつかの偶然が重なっているからである。僕がクレマンさんの自宅の庭を撮りたい、そう思って衝動のままにフランスに向いながら態勢を整えるものだが、クレマンさんの場合、次にどこにカメラをクローズアップすればよいのかが分からなかったのだ。カメラを介して撮影をする過程において、徐々に新しいまなざしの作法を体得していく体験は、これまでになくスリリングなプロセスだった。

僕はかれこれ5年間に上京都に暮らしていたのだが、自分が住み慣れている町並みをクレマンさんのまなざしからじっくり眺めていくと、よく知っているはずの風景までもがなんだか見慣れぬものに感じられてくるからおもしろかった。

僕が日本で視察するクレマンさんを撮影し始めたとき、フランス語を解さぬ僕がクレマンさんのことを知るための手がかかりは、日本での連続講演会開催のきっかけでもあった、山内朋樹さんが日本語に翻訳したクレマンさんの著作《動いている庭》や、同じく山内さんのクレマンさんについての論文などで、とても限定されていた。にもかかわらず、クレマンさんのテキスト、特に詩的な言葉はとても印象的だった。映画《動いている庭》

の冒頭で、僕はクレマンさんの言葉を著作『動いている庭』から引用している。

いかなる形にも定められない存在として用意された庭。それがどんな見かけになるのか、想像するのは難しい。

わたしの考えでは、庭こそ形によって判断されるべきではない。むしろ存在することのある種の幸福、それを翻訳することができるかどうかで判断されるべきだろう。<sup>3)</sup>

改めて読み返してみると、とても不思議な言葉である。庭について語っているのに、その庭は「いかなる形にも定められない」し、庭が庭であるための条件は、「存在することのある種の幸福、それを翻訳することができるかどうか」で決まるのである。つまり、クレマンさんにとって庭とは、「存在することの幸福を翻訳できるもの」なのである。しかし一体、「存在することの幸福」とは何だろうか？ また、それを「翻訳する」とはどういう意味だろう？

りゆく自然に寄り添っているような感覚を覚えた。先のクライマックスでも、特に事前に打合せをしたり細かな要望を伝えていたりしたわけではないが、流れるように彼の動きに寄り添うことは、無理のない、むしろとても自然で心地の良いものだった。

\*

——できるだけあわせて、なるべく逆らわない——これは、映画の中でも何度か出てくるクレマンさんの庭師としての基本的な姿勢である。この言葉はそのまゝ僕のカメラマンとして、あるいは映像作家としての姿勢にも連なっている。それは必然というべきものだった。

クレマンさんの言葉が生きた力のようなものを感じさせるのは、彼の言葉が読み手や聞き手自身にも向けられ語りかけられているように感じられるからだと思う。恵比寿映像祭のような芸術の祭典のテーマに採用されるのも、ひとりひとりに届く言葉が、良い意味でいろんな誤読を生み出し、新たな創造性を導き出すからに違いない。

映画の最後でも、僕はクレマンさんの

\*

薄暗い部屋の中、しばらくラップトップの前で腕を組み、次第に窓外の雨足が強くなってきたのに耳を澄ませる。すると、その雨音が僕の身体に働きかけ、記憶に感触が伴いはじめる。

クレマンさんは、京都の老舗刃物店の有次で手に入れた剪定鋏を片手に、樹木の葉をバリバリと鳴らす雨粒を受けながら、黙々とひとり自宅の庭で枝を切り落としていた。

すでにずいぶん長い時間撮影しただろうか。いつの間にか大粒の雨が降り注いでいて、辺りは日が暮れ、薄暗くなっている。カメラのモニターと人間の目とは感度が違って目の前の光景の見え方が異なるものだが、モニターから顔を上げると、思いがけず薄闇に包まれていることに小さな驚きを感じる。クレマンさんは、カメラをほとんど意識することなく、いつもの作業にいつもと同じように従事しているように見えた。と同時に、撮影をしている僕とクレマンさんのあいだには、意識が絶妙な距離感を保ちながら働きかけあっているような気がした。それはまるで即興的なダンスのようにも感じられた。

著作『動いている庭』の言葉を引用している。「続きを待ちながら」と題されたこの言葉もまた、広大でうつくしい樹木に覆われた「動いている庭」に誘われ、ほとんど衝動的にカメラを手にかけている僕自身に向けて語りかけられ、あるいは僕自身が試されているようにも思えてならなかった。

たった一度の旅でも、そこで見た風景の均衡をとらえてしまうこと。風景に隠されたさまざまな扉から庭にいたること。その扉は、風景の見方が引き裂かれてしまうことをも恐れない人々のためにだけ開かれている。

調理台の上に散らばるパン屑のように、真実の数々をばらまいておくこと。けれども、どんな真実もばらばらのままにせず、まるごと理解すること。ひとつの仮説にしたがって、不意にそれらを組み合わせてみる。とどまろうとする傾向に逆らうこと。

創出は生じるままにしておくこと。ある創出に、また別の創出が続いていくから。

進化とともにあれ。<sup>4)</sup>

ンスのようにも感じられた。  
クレマンさんが雨の中でひとり、ただ黙々と庭作業をやっている。僕が最も好きなシーンで、映画《動いている庭》のクライマックスである。

\*

クレマンさんを撮影する体験は、僕にとってこれまでにない不思議なものであった。僕はそれまでも多くの人物にカメラを向けてきたが、クレマンさんは、なんとというか、言葉にすると面はゆいだが、すべてに寛容で優しさに溢れているのである。人にカメラを向けるという行為は、時に被写体となる人に過度のストレスを与える。そうでなくとも、少なからず緊張を強いるものである。ゆえに、撮影する側としてもそれなりに気を配る必要があるし、そういう緊張感をうまく活かすのか、解きほぐすための手段を講ずるのか、などと思索するものだ。

ところがクレマンさんは、撮影の最初期を除き、ほとんどカメラを意識していないように見えた。あるいはまなざしを受け入れている、とも言えようか。僕は、クレマンさんを撮影しているとき、うつ

\*

クレマンさんの庭は、確かに「存在することの幸福」を感じさせる場所だった。クレマンさんとの時間は、驚きや発見に満ちていて、好奇心を刺激されながらもクレマンさんの人柄と相まって、とても豊かな心地よさに溢れていた。暖炉のある手作りの家、自給自足のための太陽光発電、自宅の畑で採れたトマトなどの野菜、谷の水辺に遊ぶサンショウウオ、そして日本の桂や紅葉やシャクナゲも含んだ多種多様な植物たち。

たぶん、ここで感じることで「幸福」は、いろんな試行錯誤の結果であり、その試行錯誤もまた「幸福」なプロセスだったのだろう。長靴のかっぱかっぱという気持ちの良い音を奏でながらしっかりと足取りで歩く古希を過ぎた翁が、「谷の庭」「野原」「草原のいかだ」など、自分の子供のように名付けた庭や場所や空間をひとつひとつ得意げに案内している様子からもその幸福感が伝わってくる。そこには、「存在することの幸福」を「翻訳」するための確かな技術があり、思想がある。

僕の心もとない経験と技術にもとづく「仮説にしたがって、真実の数々を不意に組み合わせる」ように編まれたこの映画は果たして、クレマンさんの「動いている庭」に「存在することの幸福」を、ほんの少しでも「翻訳」できているだろうか。

註

〔1〕映画《動いている庭》（澤崎賢一監督作品、日本・フランス、85分、2016年）は、「第8回恵比寿映像祭」（恵比寿ガーデンシネマ、2016年）にてプレミア上映、その後、国内外の映画館などで劇場公開された。クレマは、地球研が主催した連続講演会のために、2015年に初めて日本を訪れた。自然に寄り添い、かたちづくられ、変化し続ける彼の庭は、従来の自然と文化を截然と切り離す二分法に基づく思考の再構成を促すものである。本作では、クレマンの日本での講演や視察、暮らしの目録から記憶されたフランスの自宅の庭などを見ることが出来る。公式ウェブサイトを：<http://garden-in-movement.com/>

〔2〕記録映像《ジル・クレマン連続講演会》（日本、26分、2015年）は、地球研の活動成果の一部として制作され、Apple社が提供する iTunes U Best of 2016に選出されるなど、研究活動を端的に補足する以上の訴求力で成果還元に貢献した。映像作品および連続講演会の概要については、地球研のウェブサイトで見ることも可能。[https://www.chikyuu.ac.jp/publicity/events/etc/2015/0221\\_23\\_27.html](https://www.chikyuu.ac.jp/publicity/events/etc/2015/0221_23_27.html)

〔3〕ジル・クレマン（山内朋樹訳）『動いている庭』みすず書房、2015年、10頁

〔4〕前掲〔3〕、168頁。

澤崎賢一（さわさき・けんいち）

2015年にジル・クレマン連続講演会を撮影し、2016年にはドキュメンタリー映画『動いている庭』を監督。映画は、第8回恵比寿映像祭で初上映されてから国内外で広く公開されている。

